

翻訳のアトリエ：
パトリック・モディアノ『家族手帳』冒頭の一編

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005758

翻訳のアトリエ

ーパトリック・モディアノ『家族手帳』冒頭の一編

安 永 愛

はじめに

翻訳とは、或る意味で究極の手仕事である。昨今、自動翻訳機の発展には目覚ましいものがあると聞くが¹、ただ意味を機能的に伝達しさえすればよいというレベルならともかくも、散文であれ、韻文であれ、文章の肌理＝文体を愉しむ類いのテキストを作者の「声」の響いてくるような訳文に完成させることを自動翻訳機に望むとすれば、途方もなく複雑なプログラミングを必要とするだろう。そのようなプログラミングは思考実験としては魅力的足りえても、到底ビジネスとしては成立しないであろう。文学作品の翻訳という仕事が機械に委ねられる未来というのを、少なくとも筆者は想像し得ない。

本小論では、フランスの現代作家パトリック・モディアノ Patrick Modiano (1945-) の小説『家族手帳』*Livret de famille* (1977) の冒頭的一篇を訳文に練り上げていく過程で筆者が経た試行錯誤―すなわち翻訳のアトリエの現場―について述べつつ、翻訳という行為の手仕事の難しさと愉しさ、そして、手仕事によって触知することになった当作品の特質とその魅力の一端を指し示せればと思う。

1. 訳出テキストの選択について

『家族手帳』冒頭的一篇の翻訳の試行錯誤について述べる前に、まず、この作品を翻訳対象とした理由と経緯に触れておきたい。本作品を本論文のテーマとして取り上げるに至ったのは、2008年度前期の学部の3・4年生向けの演習

¹ 自動翻訳機の開発は冷戦に後押しされたものであるという (Henri Meschonnic, *Poétique du traduire*, Verdier, 1999, p50.)。現在、ビジネス、法律、医学、薬学、工学など、各専門分野に対応した自動翻訳ソフトが多数商品化されている。

において当作品を取り上げたのがそもそものきっかけである²。この演習においては、フランス語の文法を一通り終え、本格的な文学作品に取り組み始める学部3年生を殊に念頭に置いてテキストを選択する必要があった。

筆者は、少なくとも専門のコースの学生には、在学中にフランス文学の達成した最高度の成果に少しでも触れてもらいたいと考えている。閃光のように「何か」を照らし出す言葉に触れ、その力に圧倒される経験をしてみて欲しいのである。例えばボードレールの『パリの憂鬱』の一節の痛切な美、その逆説的な倫理観、プルーストの隠喩が隠喩を紡いでいく万華鏡のごとき文体、厳しく透徹したヴァレリーの散文、何であれ対象の表情を微細に読み取り慎ましくも優雅に語るバルトのエッセイ等々…。しかし、教師としては、基礎的な文法をようやく終えたばかりの学生にいきなりそうしたテキストに取り組ませるのは若干酷であると考え、相場感覚を持たざるを得ない。多くの学生にとって、フランス語が読める喜びよりも、難解さの苦痛が上回るというのが現実だからである。

授業が半期構成になったことをきっかけとして筆者は、主として3年生を対象とする前期の専門科目で取り上げるテキストとしては、「読めるようになった」という感覚を味わってもらうことを第一条件としつつも単なる説明文・紹介文や香気の抜けたリライトのようなものは対象外とし、文学テキストとしての魅力—作者の声の響く文体—をも備えた作品を選ぼうと心するようになった。そして、浮かび上がってきたのがパトリック・モディアノの小説群であった。

パトリック・モディアノの文体は比較的シンプルな部類に属する。比較的短い文で構成され、複雑な構文が頻出することはまずなく、難解な言葉遣いも殆ど見られないのである（とはいえそうしたシンプルさは、沈黙の重みがメランコリックな美を生む、或る意味では周到に練り上げられた逆説的なシンプルさなのではあるが）。また、モディアノの作品は、あくまで登場人物の行為の軸に沿っており、無時間的な思弁や夢想にはまり込んでいく類いのものではない。

概して物語の筋や登場人物の行為についての理解力は、学生の間でさほどの開きはないが、理解力が格段に開いてしまうのが抽象的な思考をめぐるものである。上記に挙げた、ボードレール、プルースト、ヴァレリー、バルトといった作家のテキストは、抽象化の能力や既存の概念を問い返していく思弁の力を

² この半期の演習において、15篇で構成されている『家族手帳』の第3篇目までを訳出した。毎回、担当の学生に訳文を提出させた上で、筆者の用意した訳文を示し、さらに訳文を改良する作業を進めていった。学生の訳文の中には、筆者の思いつかなかった良訳も幾つかあった。翻訳は共同作業であったと言ってよい。

閑却しては十分に読み込むことができないが、モディアノ作品の場合は、こうしたいわば人文学的な抽象性という意味での難解さはさほど見られない。モディアノ作品の理解において必要とされるのは、むしろ登場人物の心情への想像力であって、歴史的・文化的な背景に関する知識や解説は手助けにはなるものの、基本的にそれは取り立てて専門的なトレーニングに負うようなものではなく、それぞれに日常を生きていく中で、自ずと培ってきているはずの類いのものなのである。

モディアノ作品の中でも『家族手帳』は、ことに自伝的な要素との重なりが大きく、歴史的な広がりも備えており、それぞれの短編が数十頁におさまっていることから、授業で取り上げるテキストとしてふさわしいと思われた。また、邦訳が存在しないことも、学生、教員ともに共同作業をするにあたって好条件であると判断された。以上が、このテキスト選択の理由である。

2. 作者モディアノと『家族手帳』について

本節では、作者モディアノと小説『家族手帳』について概略を示しておこう。

1945年生まれのパトリック・モディアノの作品には、ドイツ占領下のフランスにあって、ユダヤ人として後ろ暗いところのある仕事に携わりつつ生き延びた不在の父親への複雑な思いが影を落としている。モディアノ自身は経験したはずもない占領下時代が、しばしば小説の中ではオブセッションの如く繰り返し語られる。モディアノにとって最もプライベートな部分に属する記憶は、歴史の忌まわしい記憶を引き寄せないではないのである。

仕事に奔走する父も、ベルギー生まれで舞台女優だった母親も不在がちであり、モディアノは弟ルディと共に幼くして祖父母の許に預けられたが、その弟も11歳にして白血病のため他界している。最も身近で具体的な他者であるはずの家族さえ、モディアノにとっては不確かで果敢ない存在だったのである。モディアノ作品の底流に常に癒しようのない欠如感と喪失感が横たわっているのは、幸薄い彼の生い立ちと無縁のことではないだろう。モディアノはアンリ四世校（パリの名門リセ）を了えると、モディアノの幾何学の家庭教師をつとめていたレイモン・クノー³ Raymond Queneau（1903－1976）³の後押しもあり、ただちに文筆の道に進んでいる。処女作『エトワール広場』*La Place de l'Etoile*を1968年に発表したのち、モディアノはほぼ一年に一冊のペースで作品を発表

³ 『地下鉄のザジ』などで知られる小説家。小説の新しい可能性を探るグループ・ウリポに属していた。

し、フランスでは「モディアノ中毒」という言葉もあるほどの根強い人気を得ている。

本論文で取り上げる『家族手帳』はモディアノ三十代前半の作品で、フィクションを交えながらも自伝的要素の強い、それぞれに独立した15の物語で構成されている⁴。あたかも、ある人の様々な時期に撮られたスナップ写真がパッチワークとなって人生を浮かびあがらせるように、これら独立した15の物語は、次第に「話者」の実存を浮かび上がらせていくのである。それぞれの物語は、話者と関わりを持った様々な時期の、実に多様な、しかしいずれも何かしら欠如を負った人物に焦点が当てられている。これらの短編群は単純な時系列を形作ることはないが、15の短編の冒頭的一篇が話者の初めての子の誕生を軸に語られ、その子が一歳の誕生日を迎えるところで最後の一篇が終えられていることで、緩やかながら構成感が演出されている。

『家族手帳』冒頭的一篇は、話者が生まれたばかりの娘に新生児室で面会する場面に始まる。そして、その日のうちに出生届を提出し、随時携行可能な戸籍謄本とも言うべき「家族手帳⁵」発行の手続きを済ませようと焦る話者と、手続きに付き添う話者の不在の父親の若き日の友人との、過去への思いと未来への思いが交錯するノスタルジックでもあり極めて実務的でもある奇妙な道行が辿られる。

冒頭的一篇は『家族手帳』という作品の、いわば中心紋である。15編の全体は、確かな拠り所となるような「家族」を持ち得なかった話者の過去と、初めて子を持ち、欠如感と喪失感を克服して未来へと一步を踏み出そうとする話者のひたむきさとの交錯で編み上げられているが、話者の過去への思いと未来への思いを繋ぐものが、小説の表題である「家族手帳」という言葉のメタフォリカルなコノテーションに託されているものであろう。冒頭的一篇は、現物そのものとしての「家族手帳」取得の顛末を語ることで、豊かに「家族手帳」という言葉のメタフォリカルな倍音を引き出しているのである。

⁴ 物語のそれぞれにタイトルはなく、ただローマ数字が付されているだけである。この作品のエピグラフとして、「生きるとは、ひたすらに記憶を完遂しようとする事だ。」(Vivre, c'est s'obstiner à achever un souvenir) とのルネ・シャールRené Charの言葉が掲げられている。

尚、以下『家族手帳』のフランス語原文の引用については、文庫本であるフォリオ版(Patrick Modiano, *Livret de famille*, Gallimard, Folio, 1981) に拠った。

⁵ フランス国民すべてが対象となる行政文書であり、『家族手帳』文庫版の冒頭頁には、以下の記述が見られる。「『家族手帳』とは何か。それは生を享けた社会にその人間存在を丸ごと結び付ける公的文書である。そこには例の行政的な素っ気なさで、生年月日、名前、両親、婚姻歴、子供について、そして場合によっては死者についての記述が連ねられている。」

3. 呼称の問題

前置きが長くなったが、まず、本作品中の話者を含めた登場人物の呼称の翻訳問題を考えてみたい。小説や物語における呼称は、その虚構世界の色調を否応なく決定づけるものであるからである。この作品に登場するのは、三十歳そこそこの男性の話者とその生まれたばかりの娘、そして話者の不在の父の若かりし頃の友人で幼少期の話者とも面識のあった Koromindé という男、そして、娘の出生届の提出先の役所の係員の女性二人と男性一人である。以下に、順次、それぞれの登場人物の呼称の決定をめぐる試行錯誤について述べてみよう。

(1) 話者の呼称

この作品の翻訳に取り組むにあたって、話者の位置づけにあるフランス語の *je* をどう訳すかは、話者のアイデンティティのありようと深く結びついた問題であり、本来ならばある程度読み進め、作品世界の基調を感じ取った上でなければ決定しようのない問題である。翻訳の授業の初回で、その点について筆者は学生たちに注意を喚起した。案の定というべきか、学生の持参した訳文において、話者の人称には「私」が充てられていた。確かに「私」と訳せばもっともニュートラルであると言えるが、フランス語と違って日本語においては男性の一人称に限っても「僕」「俺」「小生」「わし」「我輩」等々、いくつかの選択肢がある。フランス語の一人称のバリエーションが無いことを踏まえて、どれも「私」の訳語を充てるのが妥当だとする考え方もあるかも知れないが、翻訳を一つの独立した作品として楽しむ読者の立場に立って言うならば、それはあまりにサービス精神の欠けた合理主義というものである。翻訳においては、日本語における人称の多様性を生かすのが望ましいであろう。

男性を話者とするモディアノ作品のいくつかの邦訳に目を通すかぎりでは、話者を「私」としているものと「ぼく」としているものが相半ばする。例外は、『強制収容所移送者記録名簿』に想を得て書かれたノン・フィクションである『ドラ・ブリュデール』 *Dora Bruder* (初出1997年、邦訳『1941年。パリの尋ね人』)とペレックの作品を取り上げた塩塚秀一郎の研究論文中の訳文に使用された「俺」くらいである⁶。『ドラ・ブリュデール』はユダヤ人強制収容所で死を迎えた無名の少女の足跡を、ほんのわずかな徴を手がかりに、ささやかな個人

⁶ 「占領下のパリ 強制収容所 居合わせなかったものの記憶—モディアノとペレック」『フランス研究』北海道大学フランス文学研究室、2004年、21頁。

的符号（少女の住んでいた住所が、自らが足繁く通った映画館のあったオルナノ通りであったこと）に導かれるがままに無償の執拗さで辿り、記憶の欠落（無名の少女が実際どのように死を迎えたのかを今となっては誰も知りえないということ）を欠落であると言い続けることに執念をこめる話者＝モディアノの静かな迫力が感じ取られる作品である。おそらく塩塚秀一郎は、占領期をレジスタンス神話で塗りこめ、ナチス加担の事実を自国の問題として真に受け止めるに至っていなかった1990年代半ばのフランスにおいて、歴史の忘却への疑義を孤立無援の立場で静かに突きつけようとしていたモディアノに、無頼の血を嗅ぎ取ったのであろう。

話は逸れたが、筆者は『家族手帳』の話者の人称の訳語として「僕」を採りたいと思う。なぜなら話者は、自らに命を与えた父も母も、子の踏み込めない闇＝過去を抱え、人並みの親子の情愛に恵まれなかった、という欠如感を抱え、自らのアイデンティティを見出しかねており、また、初めての子を得て、自らが父性を纏うことに戸惑いを覚えている青年であるからである。たとえば村上春樹の小説の一人称の語りの多くが「僕」であるのは、アイデンティティの不安定と人間的な未熟、またその未熟を肯定する思い、そして過剰な男性性を忌避する心性が小説世界の基調を成しているからに他ならないが、モディアノの『家族手帳』も、ヒロイズムや行動主義から最も遠くにあるとってよい話者のアイデンティティの揺れこそが基調となっている類いの作品なのである。

ただ、本作品における「僕」が未熟や迷いと相即した人称ではあっても、決して未熟という価値の肯定につながるものではないという点は指摘しておかなければならない。話者の生活の場であるパリという都会は、異質な人々が交じり合い、多様な価値観が交錯し、人に成熟を強いるからである。その点を重く見る訳者ならば、未熟の肯定という安逸な気配が入りこみがちなこの「僕」という人称を嫌って、あえて話者を「私」と訳すかも知れない。

(2) 不在の父の旧友 Koromindé

出生届を提出する話者に付き添い、役所へ向かう話者の父の旧友の呼称は、原文では Koromindé となっている。カフェでの偶然の再会の場面で、この旧友がマスターから電話を取り次ぎされる際に、Monsieur Koromindé と呼ばれるのを除いて、原文においては Monsieur の敬称が付加されることはない。最初は話者とコロマンデとの年齢差からして、話者の独白においてもコロマンデを「さん付け」するのが自然に思われ、すべて Koromindé に「コロマンデさん」の訳を充

てていったのだが、ある段階にきて、「コロマンデさん」という呼称に違和感が生じてきた。どうしてもそこに、相手を単なる「おじさん」、「年長者」、「子供の頃、うちに来ていた人」として受け止める安易さ、そして過度の馴れ馴れしさが感じられ始めたのである。そこで、当初は多少の違和感なしとしなかったが、実際に呼びかける場面は別として、呼称をすべて「コロマンデ」に直してみた。

概してヨーロッパにおいて長幼の序は、儒教の影響下にある文化圏と比べると比較的軽やかに乗り越えられ、対等な関係が築かれがちであるという事情があるが、それに加えて、このコロマンデという男が、不在の父と若い頃親しく、子である話者も与り知らぬ闇の過去に通じており、またどこかしらうらぶれた、話者と同じく社会の中に確実な足場を持ち得ない人物として描かれている⁷点から考えて、「さん付け」なしのシンプルな姓のみの呼称がふさわしいと判断された。コロマンデは自分を多く語ろうとはしないし、話者も父の過去に繋がるコロマンデの過去に踏み入ろうとはしないのだが、話者にとっては初めての子であり、コロマンデにとっては旧友の孫である一人の女兒を「存在丸ごと生を享けた社会に結びつける⁸」書類の獲得に共に奮闘することで、二人の間には、年齢差や長い無沙汰の歳月を乗り越えて、共感と連帯の思いが生まれてくる。素性の知りえない、闇を抱えた人間との間に成り立つ交情。それが『家族手帳』冒頭的一篇のひとつのテーマである。したがって、コロマンデという男の実存を捉える話者の視線が「さん付け」のフィルターで曇るのは避けるべき事態なのである。

(3) 戸籍係たち

出生届の提出のため、二人はコロマンデの車に乗り役所を目指すが、道に迷った挙句、ポンコツ・レジャンスは故障で動かなくなり、やむなく二人は車を路

⁷ フランスにおいて、外国出自の名前は決して珍しいものではないが、ことKの文字で始まる姓は、外国出自が一目瞭然である。また小説の中ではコロマンデの「遅れて、とても大変、申し訳ありません、と言ってください。」(Dites-leur que nous regrettons très véritablement ce retard)の「とても大変」(très véritablement)という言葉遣いから、コロマンデがフランス語を母国語としない人間であることを話者が推し量る場面が描かれている (*Ibid.*, pp.19-20)。

また、娘の戸籍登録を無事済ませたあと、話者は次のように思いめぐらしている。

「それで、コロマンデは、何らかの戸籍簿に記されているんだろうか。もとは何人なのだろう。ベルギー人？ドイツ人？バルトの人？いやロシア人か。」Et lui? avait-il été enregistré à un état civil quelconque? Quelle était sa nationalité d'origine? Belge? Allemand? Balte? Plutôt Russe, je crois. (*Ibid.*, p.25)。コロマンデはアイデンティティの不確かな人間として描かれている。

⁸ 本論文の注2を参照のこと。

上に残したまま、役所を目指して必死に二百メートルばかりを駆け抜け、閉庁ぎりぎりに戸籍課に滑り込む。仕事から解放されようとしていた係員は、間の悪い二人の闖入者に冷たい目を向ける。係員は脇役ながらトラジ・コミカルとも言ふべき雰囲気を出しており、モディアノの物語作家としての巧みさを示しているものである。以下にこの係員の呼称の問題について考えてみたい。まず、作品中、係員については次のように記されている。

係員は三人いた。ブラウスを着た女性が二人、どちらも厳格で神経質そうな五十代、スレート色のショートカット、と双子のように似ていた。もう一人は背の高い男性で豊かなひげをポマードで固めていた⁹。

この作品の中で、「双子のように似」ている女性係員二人は、いかにもお役所的な素っ気無い、不親切で意地悪でさえある対応に終始している。そんな対応の非人間的なありようが、瓜二つの女性の身体とその動作によって強調され、むしろコミカルなものに転化している。モディアノは、繰り返し女性係員を *jumelle* (双子) と端的に名指し、男性係員の方には端的に *le mustache* の呼称を与えている。訳にあたっては、いきなり「双子」、「髭」とするのは少々唐突な感があり、初出こそ「双子係員」、「髭の係員」と訳したが、二度、三度と繰り返されるあたりからは、端的に「双子」「髭」の呼称に統一した方がリズムも出てユーモラスであることが察知されたので、直訳を通した。

「双子」の呼称は、任務の機械的反復という事態を反映・増幅する性質のもので、いわば女性係員の本質を皮肉に射抜くものであるといつてよいが、興味深いことに男性係員の呼称である「髭」の方は、物語の進行にともなって、いわば係員の本質の反転であることが明かされていく。話者が娘に付けようとした幼い頃の憧れの美人の名「ゼナイド」*Zénaïde* がフランスの聖人歴に存在しない¹⁰ことを知らされたコロマンデが咄嗟に「この人の代母の名前だったのですから」と、いっばしの芝居を打ったために、髭の係員に特例を認められ¹¹、晴れ

⁹ Ils étaient trois: deux femmes en chemisier, la cinquantaine sévère et nerveuse, les cheveux ardoise coupés courts et qui se ressemblaient comme des jumelles. Un homme grand aux moustaches épaisses et laquées. (*Ibid.*, p.19)

¹⁰ 1981年に法改正されるまで、フランスにおいては聖人歴に記されている聖人名の中から選んで命名することが義務づけられていた。

¹¹ 髭の係員は突如として *tutoyer* し、「ゼナイドで行っちゃいな！」*Va pour Zénaïde!* と発言するのである。

て希望の名付けを果たした話者に向かい、髭の係員は「さあ、終わりよければすべてよし」との言葉をかける。それを受け、話者は髭の係員について次のように語っている。

髭はとても優しい、ほとんど父親のような眼差しで僕をじっと見ていた。その目には少し涙が滲んでいるようにさえ見えた。髭は汗ばんだ手をおずおずと我々に差し伸べ、一人ずつしっかりと握手した。そしてそのとき、彼がどうしてあんな髭を蓄えているのかがわかった。髭が無ければ人相が貧弱すぎて、おそらく戸籍課係員として不可欠の威厳を欠いてしまうことだろう。

髭がドアを開けた。

「この階段から降りられますよ。」と、あたかも秘密の抜け道を教えるかのように、共犯者じみた声で言った。「さようなら。元気で、がんばってくださいよ…¹²」。

この外見と内面の落差は、公的な役所という場所を背景にしているだけに、一層、人情味を帯びている。この髭の係員は、父の不在をかこち、自らの父性の欠如を自覚している話者を、ひととき父性の微光で優しく包み込むのである。髭は一般には父権的なものの象徴であるが、髭係員はその言葉と行為によって、権威的なものではない慈愛に満ちた父性を体現しているのである。

4. 自由間接話法

先に、モディアノの作品には、複雑な構文や難解な語彙の頻出は見られないと指摘したが、モディアノは、フランス語の初学者にはかなり難しいと感じられる語法の一つである自由間接話法を多用する作家である。『家族手帳』冒頭的一篇にも、自由間接話法は随所に用いられている。

自由間接話法とは、直接話法と間接話法の中間的な位置づけにある話法で、

¹² Il me considérait avec un regard très doux, presque paternel, et qui me sembla même légèrement embué. Il nous tendit une main timide que nous serrâmes chacun à notre tour. Et je compris alors pourquoi il portait cette moustache. Sans elle, ses traits se seraient affaiblis et il aurait certainement perdu l'autorité si nécessaire aux fonctionnaires de l'état civil.

Il ouvrit une porte.

—Vous pouvez descendre par cet escalier, nous dit-il, d'une voix complice, comme s'il nous indiquait un passage secret. Au revoir, messieurs. Et bonne chance. Bonne chance... (Ibid., p. 24)

人称代名詞や時制は間接話法の従属節における人称代名詞と時制に一致しているが、自由間接話法は間接話法とは違って、Il a dit que「～と言った」とか Elle s'est dit que「～と思った」といった、発言内容や内的独白の内容が盛られた節を導きだす導入の言葉を伴わない。

この話法は、物語の語り手の語りと登場人物の発言や内的独白とが、あたかも混じりあうかの如き印象を与える。語り手が登場人物の内面に身を置いて、霊媒のごとく語っているかの如く感じられるケースが多い。また、語り手が黒子と化し、登場人物の言葉が声として響いてくるとの印象を与えることもある。作家は、この自由間接話法を間接話法や直接話法と巧みに組み合わせながら、登場人物との距離感を繰り返していくのである。

『家族手帳』冒頭的一篇における、最初の自由間接話法の例を見てみよう。話者が偶然、レストランで電話の呼び出しの名前を耳にしたことから、コロマンデとの久方ぶりの再会を果たす場面である。モディアーノが以下に話法をいかに組み合わせているかを見るために、自由間接話法を含む部分を長めに引用することとする。自由間接話法に相当する訳文には、下線と番号を付してある。間接話法、直接話法も含め、翻訳にあたって話し言葉の再現には、話者の立場や相手との関係を考慮し、特に語尾を慎重に選択しなければならない。ちなみに話者とコロマンデは vouvoyer で話している。

…電話が鳴り、バーテンが受話器を取った。そしてカウンターの男の方を振り返って言った。

「コロマンデさん、電話ですよ。」

コロマンデ…父さんの若い頃の友人の名前だ。子供の頃、よく家に遊びに来ていた人だ。コロマンデは電話口に出たが、その深々としたとても優しい声、そしてrの巻き舌に聞き覚えがあった。コロマンデが受話器を置くや僕は立ち上がり、彼に歩み寄っていった。

「ジャン・コロマンデさんですか？」

「ええ、そうですが。」

コロマンデは驚いた様子で、僕をまじまじと眺めた。僕は名乗りを上げた。コロマンデは感嘆の声を上げた。それから寂しげな笑みを浮かべて言った。

「大きくなりましたな。」

「はい。」僕は弁解するように背中を丸めそう答えた。つい数時間前、父親になりまして、と僕はコロマンデに告げた。コロマンデは感激して、子供の誕

生を祝し酒をおごってくれた。

「父親、って、なかなかのものでしょうか。」

「そうですね。」

我々は連れ立ってレスペリアという名のレストランを後にした。

コロマンデは、車で家まで送りましょう、と言って、年季の入った黒のレジヤンスのドアを開け迎え入れてくれた。道すがら、我々は父親の話をした。

君の父さんにはもう二十年というもの会っていないなあ①。僕だって、父さんの消息については、十年来、全くわからないんです②。我々はどちらも父さんの消息がわからないわけだ③。私はね、まさにここエスペリアで君の父さんと夕食をとった一九四二年の一晚を覚えているよ…。そう、今夜行ったあのレストランだ。三十年経って私は「お孫さん」の誕生を知ったというわけだね…④

「時間は流れるもんですな…」

コロマンデの目には涙が浮かんでいた。

「それで、そのお孫さんにね、お目にかかせてもらえないだろうか。」

そこで僕は、娘の出生届を明日役所へ提出しに行くのに付き合ってくださいませんか、と切り出した。コロマンデは申し出を喜んで受けてくれ、我々は、五時丁度、病院前での待ち合わせの約束をしたのだった¹³。

以上のように、再会に続くレストランでの会話はほとんど直接話法で書かれているが、コロマンデの車に同乗しての会話は自由間接話法で書かれている。下線部①と④がコロマンデの発言であり、下線部②が話者の発言である。下線部③にいたってはコロマンデの発言か話者の発言であるかを識別する手がかりはない。車というアンティームな空間が、二人の距離を近づけているのが伺わ

¹³ Le téléphone a sonné et le barman a décroché le combiné. Il s'est tourné vers l'homme:

— C'est pour vous, monsieur Koromindé.

Koromindé... Le nom d'un des amis de jeunesse de mon père, qui venait souvent à la maison lorsque j'étais enfant. Il parlait au téléphone et je reconnaissais la voix grave et très douce, le roulement des r. Il a raccroché, je me suis levé et j'ai marché vers lui.

— Jean Koromindé?

— Lui-même.

Il me dévisageait, l'air étonné. Je me suis présenté. Il a poussé une exclamation. Puis, avec un sourire triste:

— Vous avez grandi...

— Oui, ai-je répondu après m'être voûté et comme en m'excusant. Je lui ai annoncé que j'étais père, depuis quelques heures. Il était ému et il m'a offert un alcool pour fêter

れるであろう。しかし一方で自由間接話法は、直接話法に比べるならば、会話自体を一種のフィルターを通して記す性質を持っていると言えるのであり、発語そのものを、現実や行為への係留点を持たない朧げな、虚空に放たれたものとして活字たらしめる側面を持っていることも見逃してはならない。自由間接話法から直接話法へと切り替えられるとき、今度は現実や行為への距離が縮まっていることが感じ取られるであろう。話者の娘との面会の希望を申し出るコロマンデの台詞は、自由間接話法ではなく直接話法で、書かれるべくして書かれているのである。

以下に挙げる自由間接話法の例は、上記の例とは違い、コロマンデの独白の連続であるが、自由間接話法のもつソフト・フォーカスの、いわば淡彩の味わいが感じ取られるであろう。コロマンデの車に同乗し、出生届を提出しに役所へと向かう場面から引用しよう。自由間接話法の部分は、日本語の場合、直接話法や間接話法との時制や人称による区別を示し得ないので、物語の話者の語りではなく他の登場人物の発言であることを示すために、話し言葉的な調子をうるさくない程度に盛りこまなければならない。

我々の車はアンケルマン通りを行進でもするかのようにのろのろ進んでいった。コロマンデは通りの右側に見える、丸い窓と半円形の大きなバルコニーのある砂色の建物を指差してみせた。

「君の父さんは、一ヶ月間、この建物に住んでいたんだ。最上階にね…。」

cette naissance.

—Père, c'est quelque chose, hein?

—Oui,

Nous avons quitté ensemble le restrand, qui s'appelait L'Esperia.

Koromindé m'a proposé de me ramener chez moi en voiture et m'a ouvert la portière d'une vieille Régence noire. Pendant le trajet, nous avons parlé de mon père. Il ne l'avait pas revu depuis vingt ans①. Moi-même je n'avais aucune nouvelle de lui depuis dix ans②. Nous ignorions l'un et l'autre ce qu'il était devenu③. Il se souvenait d'un soir de 1942 où il avait dîné en compagnie de mon père à L'Esperia justement... Et c'était là, dans le même restaurant que ce soir, trente ans plus tard, il apprenait la naissance de «cette petite enfant» ...

—Comme le temps passe...

Il en avait les larmes aux yeux.

—Et cette petite enfant, je pourrais la connaître?

C'est alors que je lui ai proposé de m'accompagner le lendemain à la mairie pour inscrire ma fille à l'état civil. (*Ibid.*, pp.14-15)

君の父さんの二十五歳の誕生日もそこで祝ったんだけど、どの部屋だったか私もはっきり覚えていない。俺が住んでる、そう君の父さんは言ってたんだが、その建物っていうのが、どれもこれも同じ外観でね。そんな風だったから。私は三十七年の夏の日が傾くころを忘れてはいないよ。夕日の最後の輝きでオレンジ色がかかった薔薇色に染められていたテラスも。君の父さんは素肌にガウンのいでたちで迎えてくれた。テラスの真ん中に、古いソファールとガーデン・チェアを並べてくれていた…

「それから、私はアペリティフを注いだんだよ¹⁴。」

この引用の最後の直接話法の後には、コロマンデの危なげな運転の記述が続く。すなわち、定時までに役所に到着しなければならないという現実に戻されわけである。このような回想と現実との往来、台詞と行動との距離の自在な変化が、この短編に奥行きとリズムを与えている。以下に記す冒頭的一篇の終結近くに位置する自由間接話法で記されたコロマンデの語りは、徒労感と喪失感、そしてノスタルジーとメランコリーがあいまって、切々と胸を打つ。翻訳にあたっては、話し言葉の口調を残すとともに、聞き手である「僕」に聴かせることだけが目的の台詞ではなくコロマンデ自らが自らに言い聞かせるような独白でもあることに留意しなくてはならない。自由間接話法の現れる少し前から訳を示してみる。例によって自由間接話法には下線を付しておく。

車は、ポルト・ド・テルヌ大通りにさしかかった。そこは、環状道路敷設の始まっている地区にあった。マイヨーシャンペレ間の込み入ったゾーンで、

¹⁴ Nous suivions boulevard d'Inkermman à une allure de procession. Il me désigna sur la droite un immeuble de Couleur sable avec des fenêtres-hublots et de grands balcons en demi-cercle.

—Votre père a habité un mois ici...au dernier étage...

Il y avait même fêté ses vingt-cinq ans, mais Koromindé n'en était pas sûr: tous les immeubles où séjournait mon père, me dit-il, présentaient la même façade. C'était ainsi. Il n'avait pas oublié cette fin d'après-midi de l'été 37 et la terrasse que les derniers rayons du soleil éclairaient de rose orangé. Mon père—paRaît-il—recevait torse nu sous une robe de chambre. Au milieu de la terrasse, il avait disposé, un vieux canapé et des chaises de jardin.

—Et moi, je servais les apéritifs. (Ibid.,p.17)

(フランス語原文の途中に—paRaît-il—とあるのは、コロマンデの r の発音の特徴的な巻き舌を模したものであるが、日本語の訳ではうまく示しえない。)

爆撃後の如くごたごたして、わかりにくいところだ。

「いつか君の父さんと一緒に、ここに来たことがあるよ。」とコロマンデが僕に言った。

「そうなんですか。」

そう、君の父さんが、このあたりに車で連れてきてくれたんだよ。父さんは愛車フォードの部品の置いてある自動車整備場を探していた。父さんはその場所がはっきり思い出せなくて、一緒にこの界限を長いこと右往左往したんだ。今はもう跡形もなくなっているけどね。道路の両端には並木があって、通りは緑のトンネルで覆われていた。道の右側にも左側にもそれぞれ自動車のサービス・ステーションと倉庫があったんだけど、まるで廃屋のようだった。ガソリンの甘いようなにおいがしていた。ようやく俺たちは「アメリカ車部品」の業者の建物の前に車を停めた。ポート・デ・ヴィリエ通りは南西部の小さな町の並木道みたいだった。プラタナスの並木が四列あってね。俺たちはベンチに座って修理が終わるのを待った。シェパードが歩道の縁にごろんと横になって寝ていた。子供たちが往来のない道路の真ん中で、木漏れ日の中、追いかっこをしていた。八月の土曜日の昼下がり、戦争直後のことだった。俺たちは押し黙っていた。君の父さんは、どうも気が塞いでいたようだった。私はといえばね、俺たちの青春は終わったんだな、としみじみ感じたよ¹⁵。

モディアノは、自由間接話法が、思い出の果敢なさと切なさを表現するのに

¹⁵ Nous nous engageons avenue de la Porte-des-Ternes dans ce quartier que l'on avait éventré pour construire le périphérique. Une zone comprise entre Maillot et Champerret bouleversée, méconnaissable, comme après un bombardement.

— Un jour, je suis venu par ici avec votre père, me dit Koromindé.

— Ah, bon?

Oui, mon père l'avait emmené en automobile par ici. Il cherchait un garagiste qui lui procurerait une pièce de rechange pour sa Ford. Il ne se souvenait plus de l'adresse exacte et longtemps Koromindé et lui avaient sillonné ce quartier, aujourd'hui complètement détruit. Rues bordées d'arbres dont les feuillages formaient des voûtes. De chaque côté, des garages et des hangars qui paraissaient abandonnés. Et la douce odeur de l'essence. Enfin, ils s'étaient arrêtés devant un établissement, fournisseur de « matériel américain ». L'avenue de la Porte-de-Villiers ressemblait au mail d'une toute petite ville du Sud-Ouest, avec ses quatre rangées de platanes. Ils s'assirent sur un banc en attendant que le garagiste eût terminé la réparation. Un chien-loup était allongé en bordure du trottoir et dormait. Des enfants se poursuivaient au milieu de l'avenue déserte, parmi les flaques de soleil. C'était un samedi après-midi d'août, juste après la guerre. Ils ne parlaient pas. Mon père — paraît-il — était d'humeur mélancolique. Koromindé, lui, comprenait que leur jeunesse était finie. (Ibid., pp.26-27)

効果的な話法であるとの確信を得ていたのであろう¹⁶。

モディアノは、この『家族手帳』冒頭的一篇の最後を自由間接話法で終えている。このような終わり方は、かなり特殊な例に属する。それがどのようなものであるか、自由間接話法の少し前の部分から以下に翻訳を示してみよう。下線を付したのが自由間接話法の部分である。

我々はテルヌ通りに出たが、コロマンデはまた足を引きずり始めた。僕はコロマンデの腕を取った。街灯がグヴィオン・サン・シール大通りを照らしていた。車の長蛇の列が出来、人がどっと繰り出し、ラッシュの始まる時間だったが、そうしたものは一切新生児室には入り込んでこなかった。僕は窓ガラスに触れるプラタナスの枝の穏やかな動きをふたたび眺めた。

…要するに我々は、今しがた何かの始まりを共にしてきたんだ。この小さな女の子は、将来、我々のちょっとした代表者になるのだ。それに、この子は、我々がいつも取り逃がしてきた、あの不思議な宝を一発で手にしたわけだ。つまり「戸籍」を¹⁷。

この自由間接法の部分の主語は nous である。つまりこれは、コロマンデと話者との間にささやかな共感と連帯の思いが成立したことを印象づける終結なのである。互いにまともな「戸籍」を得られないできた人間として¹⁸、まともな戸

¹⁶ 自由間接話法を愛用する作家としては、フローベールやモーリヤックやゾラが挙げられる。

¹⁷ Nous arrivions avenue des Ternes et Koronmindé recommençait à boiter. Je lui pris le bras. Les lampadaires s'allumaient boulevard Gouvion-Saint-Cyr. C'était l'heure des longues files de voitures, de la foule, des bousculades, mais rien de tout cela ne pénétrait dans la nursery. Je revis le balancement serein de la branche contre la vitre.

En somme, nous venions de participer au début de quelque chose. Cette petite fille serait un peu notre déléguée dans l'avenir. Et elle avait obtenu du premier coup le bien mystérieux qui s'était toujours dérobé devant nous: un état civil. (Ibid., p.27)

¹⁸ 話者の所有する「家族手帳」に父は偽名で載っている (Ibid., pp.11-12)。この短編の冒頭近くには、あらゆる公的文書に対する話者の格別の思いが以下のごとく記されているが、それは自らの出自に闇を抱えている人間ゆえに抱かれる感懐なのであろう。

「僕は、赤い皮のカバーのかかった小さな帳面—『家族手帳』をめぐりつつ、病院の階段を降りていった。僕は「家族手帳」というタイトルに何か襟を正したくなるような関心をかきたてられていた。それは、免状、公正証書、家系図、土地台帳、古文書、血統書といった、ありとあらゆる公的文書を前にして湧く関心と同様のものだった。」《Je descendis les escaliers de l'hôpital en feuilletant un petit cahier à couverture de cuir rouge, le: «Livret de Famille». Ce titre m'inspirait un intérêt respectueux comme celui que j'éprouve pour tous les papiers officiels, diplômes, actes notariés, arbres généalogiques, cadastres, parchemins, pedigrees...》 (Ibid., p.12)

籍をすんなりと手にした新生児に、共に希望を重ねよう。そのような思いの伝わってくる語りである。しかし、この nous の語りの主体は誰なのかを確定するのは実は容易ではない。最初は、コロマンデの言葉を自由間接話法に乗せたものとも取れたのだが、「我々がいつも取り逃がしてきた、あの不思議な宝」という凝った表現が実際に口にされたとは考えにくい。また、自由間接話法の直前に、娘の眠る新生児室でプラタナスの枝の動きに目をやる話者のことが描かれていることから、この物語の最後の自由間接話法は、話者の内的独白を後の視点から振り返って定着させたものであると読むのが妥当であると考えられる。

この終結部は、父の記憶の闇に苛まれ自らの父性の欠如に一人耐えているかのごとき張り詰めた話者の心がひととき解き放たれ、静かに高揚するかのような印象を与えることに成功している。この部分をモディアノが自由間接話法にしているのは、話者としてはいつになく高揚したこの前向きな思いを、過去のある時点で抱いた思いであるとして距離化するためであったと考えられる。そこに、喜びとためらいの入り混じる新米の父親としての幸福感の、抑制された表現を見ることが出来るだろう。

話者自身の内的独白が自由間接話法で表されているという事態は、フランス語においては時制の指標によって判別がつくが、日本語の訳においてそれを再現するのは非常に難しい。そのため、この終結部の自由間接話法の冒頭に、原文には存在しない「…」を挿入せざるを得なかった。最後に「そうひとりごちた」とでも言葉を加えたいところだが、やはりそれでは説明的に過ぎるだろう。翻訳の難しさを噛み締めざるを得ない箇所である。

5. 「しっくりくる」、「腑に落ちる」訳を求めて

総じてモディアノ作品の「読解」はさほど難解ではないが、翻訳において、彼の文体の、いわば装われたシンプルさを忠実に表現するには、それなりの工夫が必要である。モディアノのフランス語を正確なだけでなく、小説らしい日本語に仕上げるにあたって、実際どのような工夫が必要となるのか、試みに『家族手帳』冒頭的一篇の書き出しの部分を取り上げ、細かく検討してみたい。少々煩雑であるが、工夫を要する部分について下線を引き、番号を付してある。

僕はガラスパネル越しに、娘をじっと見ていた①。左の頬を下にし、口を半開きにして眠っている②。生まれて二日経ったばかりで、呼吸の動きも見てとれなかった③。

僕は額をガラスに貼り付けていた。ゆりかごまでは何センチかの距離があり、仮にゆりかごがふわふわと宙に浮いて揺れていたとしても④、僕は驚きはしなかっただろう。プラタナスの枝が、扇のような規則正しいリズムで窓をそっと撫でていた⑤。娘は「キャロリーヌ・エリック新生児室」の表示のある白とスカイブルーで構成されたその小部屋を一人で占めていた。娘を見られるようにと、看護婦がゆりかごをガラスパネルぎりぎりのところまで押してきてくれていたのだった。

娘は身じろぎだにしなかった⑥。その小っちゃな顔⑦には至福の表情が浮かんでいた。プラタナスの枝⑧が静かに揺れ続けていた。ガラスパネルに鼻を押し付けていたものだから、吐息の跡がついた⑨。

看護婦が戻ってきたので、僕はさっと身を起こした。五時⑩も近く、戸籍課の窓口が閉まる前に役所に着こうとするなら、もう一刻たりとも無駄にはできなかった¹⁹。

以下に、①から⑩までの訳語の選択について若干の説明を加えよう。

まず①にあたる原文の動詞は *observais* であるが、仏和辞典の最初に載っている訳語そのまま「観察していた」とするのは少々乱暴である。副詞と動詞の組み合わせになるが「じっと見ていた」と訳す方が場面に合っているであろう。

②と③にあたる原文はどちらも半過去形であるが、日本語の場合、現在形によっても過去のことを示せるので、時に現在形の訳を取った方が語尾が単調にならず、リズムが生じてよい。しかし、これもケースバイ・ケースである。た

¹⁹ *J'observais* ① *ma fille*, à travers l'écran vitré. Elle *dormait* ②, appuyée sur sa joue gauche, la bouche entrouverte. Elle avait à peine deux jours et on *ne discernait pas* ③ les mouvements de sa respiration.

Je collais mon front à la vitre. Quelques centimètres me séparaient du berceau et je n'aurais pas été étonné, *s'il s'était balancé dans l'air, en état d'apesanteur* ④. La branche d'un platane *caressait* ⑤ la fenêtre avec in régularité d'evantail. Ma fille occupait seule cette pièce blanc et bleu ciel qui portait le nom de «Nursery Caroline Herrick». L'infirmière avait poussé le berceau juste devant l'écran de verre pour que je puisse la voir.

Elle *ne bougeait pas* ⑥. Sur son *minuscule* ⑦ visage flottait une expression de béatitude. La branche ⑧ continuait d'osciller en silence. *J'écrasais mon nez contre la vitre et cela faisait une tache de buée* ⑨.

Quand l'infirmière reparut, je me redressai aussitôt. Il était près de *dix-sept heures* ⑩ et je n'avais plus un instant à perdre si je voulais parvenir la mairie, avant la fermeture de l'état civil. (*Ibid.*, pp.11-12)

たとえば上記の⑥⑦⑨も半過去形の連続となっているが、日本語で過去形の連続に訳しても、なぜか違和感はない。それぞれの文の印象が鮮烈であるせいだろうか。こちらの場合は、現在形の訳に直すべきところはないように思われる。

さて、④に戻るが、原文では *s'il s'était balancé dans l'air, en état d'apesanteur* である。直訳すると「仮にゆりかごが無重力状態で空中で揺れていたとしても」となるが、日本語には「ふわふわと」という擬態語があるので、こちらを使用するのが良いであろう。*en état d'apesanteur* という単語の連なりによって、ことさらに難解で固い雰囲気を出しようとする狙っているわけではないと思われるからである。

⑤は、①の例と同じで、フランス語の一つの動詞 *caressait* を副詞と動詞の組み合わせで訳したものである。フランス語の動詞の直訳が場面に照らし、口調として固すぎると感じられる際に、擬態語とシンプルな動詞で翻訳するのは有効な方法であるように思われる。

⑥のフランス語原文は *Elle ne bougeait pas.* という半過去形による単なる否定文であるが、「娘は動いていなかった。」という直訳では物足りない。正確に言うと日本語には半過去形に対応するものがないが、半過去の示す「ある幅を持った過去の時間」ということを念頭に置けば、時間がいくらか流れても「動かない」という事態は、「身じろぎだにできなかった」という踏み込んだ訳を必要とするものだということが理解されるであろう。

⑦のフランス語原文は *minuscule* である。「ごく小さい」、「微小の」といった訳が仏和辞典には掲載されているが、このままではしっくりこない。少しでもけた子供っぽい表現になるのだが、「小っちゃな」という形容詞には、なぜか「小さい」という形容詞よりもっと小さなものを指すイメージがある。「ごく小さな」などとするより実感に沿っているであろう。

⑧の原文は *La branche* で、直訳すれば「その枝」ということになるが、翻訳としては不十分である。「プラタナスの枝」というフレーズを繰り返すべきである。見逃しがちであるが、フランス語の定冠詞にはそれだけの重みがある。この新生児室の窓をそっと撫でる「プラタナスの枝」は、『家族手帳』冒頭の一編の終結部でも繰り返される、印象的なディテールである。

⑨に当たるフランス語原文は *J'écrasais mon nez contre la vitre et cela faisait une tache de buée.* で、後半は物主構文となっているが、日本語において物主構文は不自然な印象を与えるので、できるだけ避けるべきである。「鼻をガラスパネルに押し付けていたので、吐息の跡がついた。」との訳でも問題はな

いが、「押し付けていたものだから」と訳すと、「ちょっとヘマをしたな」、「やれやれ」といった自己客観化のニュアンスが加わり、雰囲気が出るだろう。

⑩はフランス語原文では dix-sept heures で、直訳すれば十七時となるが、日本語ではあまりこういう言い方はしない。また午後五時と補足するにも及ばない。役所の閉まる時間を気にしているのだから、午前五時ということはありません。「五時」の訳が自然であろう。

以上、冒頭部分を一例として取り上げて、訳の工夫について縷々述べてきた。翻訳という作業が、文法的な正確さを目指すだけではなく、どうすれば日本語として「しっくりくるか」、「腑に落ちる」表現になるか、と語感を研ぎ澄ませて試行錯誤することであるということが理解されるであろう。他に適当な言葉が見つからず、はからずも「しっくりくる」、「腑に落ちる」という言葉を用いたが、そのような身体的な言葉でしか言い表せないレベルの作業が、翻訳の重要な部分を担っていると考えられるのである。

むすびにかえて

以上、パトリック・モディアノ『家族手帳』の冒頭的一篇の翻訳作業にまつわる試行錯誤を示すとともに、モディアノ作品の特質に触れるコメントも幾らか差し挟んできた。しかし、結論めいたものを書いて、屋上屋を架すのはやめておこう。ここでは、別の問題を提起して結びにかえたい。

翻訳とはひとつひとつの細部を「しっくりくる」、「腑に落ちる」母国語に置き換える作業をともかく愚直に積み上げていくものであるが、恐ろしく緩慢にしか進まないこの作業は、その遅さゆえに、作品を読む行為よりも、作品を書く行為に近づいていくという一面を持っているのではなかろうか。翻訳とは、創作の立場に身を置く疑似体験でもあると言えるのではないだろうか。翻訳というものが原文の徹底的な読み込みの上に成り立つことを承知の上で言うのだが、翻訳行為を創作の疑似体験のように幾分かでも感じ取ることができたとき、訳文に表現力が加わるのではないか。筆者にはそのように思われてならない。

2009年度も『家族手帳』の続きの短編を演習で取り上げる予定であるので、また翻訳の新たな試行錯誤について報告し、モディアノの創作の特質について若干の見解を示せばと考えている。